

## 関東大震災とリスボン大地震

——天譴論・内村鑑三・ヴォルテール——

半澤 健市

はじめに——「東日本大震災」への反応として

二〇一一年三月一日に発生した「東日本大震災」は日本人に大きな衝撃を与えた。我々はこの衝撃をまだ受け入れかねている。他国への衝撃の比ではない。この衝撃は深く長く続くだろうと思う。私は歴史認識の範囲を少し広げてこの文章を書いていきたい。

今次の震災に関しての言説は既に世上に溢れている。印刷物だけを見ても、原発に関するもの、放射能汚染に関するもの、経済社会に関するもの、復興計画に関するもの、心の持ち方に関するものまでおよそ考え得るあらゆる

ゆるジャンルの書籍、雑誌が書店に平積みになっている。

「歴史認識の範囲を少し広げて」というのは、今次の震災が日本近代を揺るがすほどの大事件でありパラダイムの転換が避けられないと思うからである。

東日本大震災の衝撃の正体に迫りたいというのが私の希望である。そのため次の二つの道から接近する。

一つは、「関東大震災」と「リスボン大地震」に関する言説の分析である。

二つは、東日本大震災から見えてくる近代社会における科学の在りようについての考察である。ただし今回は第一のテーマまでしか考察できなかった。

「関東大震災」を振りかえる理由は、今次震災の現状

は余りに生々しく正確な事実認識への確信がもてないこと、過去の類似の経験となれば関東大震災に関心をもつのが自然であろうこと、の二点である。

私の関心は震災の事実より震災観にある。今次震災の衝撃の大きさとその本質とが、所謂「形而下学」的な認識——コンベンショナルな問題意識——では十分に把握できないと考えるからである。「形而上学」的というと理屈っぽく感じられよう。しかし三・一一以降の日本人はひそかに形而上学的関心を持ち始めたと私は推定している。この震災は「第二の敗戦」、「近代の終焉」に至る要素を秘めていると私は感じている。

「リスボン大地震」を取り上げる理由は、西欧版天譴論争であり、我々の「形而上学」的思考との共通性が多いからである。

話の展開は、渋沢栄一に発する天譴論を紹介したあとキリスト者内村鑑三の大震災論を考察する。次にリスボン地震に関するヴォルテールとルソー間の論争を紹介することになる。

## 一 実業家渋沢栄一の大震災論

関東大震災における言説で興味を惹かれるのは「天譴論」である。それは実業家渋沢栄一に発する。渋沢の天譴論から二つを次に掲げる（現代かな遣いに修正）。

日本は明治維新から僅々数十年を出ずして世界列強の班に入った。この長足の進歩は世界の均しく驚嘆するところである。と同時に我が国民の自ら顧みて衷心聊か自負する処が尠なくなつたと思う。私は近頃我が国民の態度が余り泰平に狎れ過ぎはしないかと思う。順調に進み平穩に終始すれば、勢い精神の弛緩するのは已むを得ない処かも知れないが、我が国民が大戦以来所謂お調子づいて鼓腹撃壤に陥りはしなかつたか、これは私の偏見であれば幸いであるが兎に角、今回の大震災は到底人為的なものではなく、何か神業のように考えられない。即ち天譴といふような自責の悔を感じない訳には行かない。<sup>①</sup>

洪沢は忘れっぽい日本人に対して震災の一年後にこう書いている。

私は此震災を迷信的に解釈して、今時の国民は少し浮かれ過ぎるから天が斯様な罰を与えたもので、謂わば天譴ではないかとも考える。／要するに新春を迎えると共に、自然の空気が、一般の気合が緊張して欲しいものである。己を中心として、人の揚足取りのみを得意とする様では、夫の恐ろしい天譴を余り早く忘れ過ぎたと見ねばなるまい。吾々国民は厚始一新する事が必要である。<sup>(3)</sup>

天譴とは何か。

洪沢は天譴を日常語の「天罰」と同意に使っているが、語源を辿れば中国前漢時代の儒学者董仲舒とうちゆうしよに発するといふ。「天人相関説」の別称もある。<sup>(3)</sup>

その意味は、君主の政治的失敗に対して「天」が地上に警告、譴責を行い統治への反省を促すということである。日本では君主は天皇であるが、洪沢は注意深く天皇

への譴責ではなく国民全体への譴責であると読みかえている。<sup>(4)</sup>

## 1 文学者による天譴説への反応

洪沢の言に対する賛同者は、識者の間にも続々と現れた。ここでは主に文学者の言辭をみていきたい。

詩人北原白秋は「大震抄」なる一三首の短歌を残した。中から「天意下る」と名づけられた七首を掲げる。<sup>(5)</sup>

・世を挙り心傲ると歳久し天地の譴怒いただきにけり

・地は震へ轟き享る生けらくやたちまち空しうちひしがれぬ

・大御怒避くるすべなしひれ伏して揺りのまにまにまかせてぞ居る

・言挙げて世を警むる国つ聖いま顕れよ天意下りぬ

・大王は天の譴怒と躬自ら照らす御光も謙しみたまへり

・国民のこのまがつびは日の本し下忘れたる心ゆ来

れり

・大正十二年九月ついたち国ことごと震しんとほ亨れりと  
後世警めのちよ

作家で英文学者の坪内逍遙は「大震災より得たる教訓」という論文で「天譴」および「天幸」について詳しく述べている。逍遙の結論は天譴論を支持しているとはいえないが明確に反論するでもない。文中に次のくだりがある<sup>6)</sup>。

常識的に観れば、今度の地震は前古未曾有の、殆ど世界の史上にも先例のなかつた程の大災といふに止まるが、或ひはやゝ皮肉に、却つて一種の天幸であつたのだと観る見方もある。或ひは天譴だと観る者もある。東西、内外ともに、昔から何か大きな災厄が起ると、これを神又は天が人間の不埒を憤る余りに降す懲罰と解する例がある。／真面目に宗教的に力説された天譴説は、余りに無辜の罹災者を冷眼視した見方だといつて、一部の、殊に若い文学者連の反感を挑発した気味であつたが、／天譴を自然の心報といふくらゐの意味に取つて、社会的に又個人的

に反省自戒する一機縁とすることには誰れしも強<sup>あなが</sup>ち異議もなささうである。／われわれは須からく今度の大災に教えられて、内外の自然を虐使したり拘禁したりしないで、馴致し、善用し、且常に愛、相助の生活を営むことに其最善の努力を致し、依つて以てわが日本の新文化に、又世界の新文化に貢献すべきである。(一九二三年二月)

## 2 芥川龍之介による天譴論批判

洪沢栄一の天譴論に全ての識者が賛成したわけではない。それに「反発した若い文学者連」の一人に芥川龍之介がいた。『羅生門』では人心の荒廃を描いた作家は「大震に際せる感想」にいう<sup>7)</sup>。

この大震を天譴と思へとは澁澤子爵の云ふところなり。誰か自ら省れば脚に疵なきものあらんや。脚に疵あるは天譴を蒙る所以、或は天譴を蒙れり思ひ得る所以なるべし。されど我は妻子を殺し、彼は家すら焼かれざるを見れば、誰か又所謂天譴の不公平

なるに驚かざらんや。不公平なる天譴を信ずるは天譴を信ぜざるに若かざるべし。否、天の蒼生に、――当世に行はるる言葉を使へば、自然の我我人間に冷淡なることを知らざるべからず。

自然は人間に冷淡なり。大震はブルジョアとプロレタリアとを分たず。猛火は仁人と澁皮とを分たず。自然の眼には人間も蚤も選ぶところなしと云へるトゥルゲネフの散文詩は真実なり。／同胞よ。面皮を厚くせよ。「カンニング」を見つつけられし中学生の如く、天譴なりなどと信ずること勿れ。僕のこの言を做す所以は、澁澤子爵の一言より、滔滔と何でもしやべり得る僕の才力を示さんが為なり。されどかならずしもその為のみにはあらず。同胞よ。冷淡なる自然の前に、アダム以来の人間を樹立せよ。否定的精神の奴隷となること勿れ。

芥川は別のエッセイ「大震災記」<sup>(8)</sup>で書いている。作家が丸の内の焼け跡を二度目に通つたときのことである。前回には馬場先の濠に何人かが泳いでいた。今日も三、四人が裸で泳いでいた。次のように書いている。

僕はかう云ふ景色を見ながら、やはり歩みをつづけてゐた。すると突然濠の上から、思いもよらぬ歌の聲が起つた。歌は「懐しのケンタッキイ」である。歌つてゐるのは水の上に頭ばかり出した少年である。僕は妙な興奮を感じた。僕の中にもその少年に聲を合せたい心もちを感じた。少年は無心に歌つてゐるのであらう。けれども歌は一瞬の間にいつか僕を捉へてゐた否定の精神を打ち破つたのである。

芸術は生活の余剰だそうである。成程さうも思はれぬことはない。しかし人間を人間たらしめるものは常に生活の余剰である。僕等は人間たる尊嚴の為に生活の過剰を作らねばならぬ。更に又巧みにその過剰を大いなる花束に仕上げねばならぬ。生活に過剰をあらしめとは生活を豊富にすることである。僕は丸の内の焼け跡を通つた。けれども僕の目に触れたのは猛火も亦焼き難い何ものかだつた。

最初の文章には「冷淡なる自然の前に、アダム以来の人間を樹立せよ。否定的精神の奴隷となること勿れ」と

洪沢の天譴論に強く反発している。二つ目の文章では少年の歌声によって作家の精神が救済される一瞬を描いている。いずれも、理知的でシニカルだと見られていた作家がヒューマンな心情を吐露している。

### 3 被服廠に遁げ込んだ「常民」への視線

のちの民俗学者柳田国男は、農商務省勤務、貴族院書記官長を経て、関東大震災の一九二三年には国際連盟の委任統治委員としてスイスに勤務していた。一九二五年九月五日に沖繩で行った講演の冒頭で柳田は次のように発言した。(『青年と学問』、一九二八年)

大地震の当時は私はロンドンにいた。／＼抹(デ)ンマークで開かれた万国議員会議に列席した数名の代議士が、林大使の宅に集まり悲しみと憂ひの会話を交へて居る中に、在る一人の年長議員は、最も沈痛なる口調を以てこういうことをいった。これはまったく神の罰だ。あんまり近頃の間人が軽佻浮薄に流れたからだといった。

私はこれを聴いて、こういう大きな愁傷の中ではあつたが、なお強硬なる抗議を提出せざるを得なかつたのである。本所・深川あたりの狭苦しい町裏に住んで、被服廠に遁げ込んで一命を助かろうとした者の大部分は、むしろ平生から放縦な生活をなし得なかつた人々ではないか。彼等が他のろくでもない市民に代つて、この惨酷なる制裁を受けなければならぬ理由はどこにあるのかと詰問した。

この議員がしたような断定は、もちろん一種の激語、もしくは愚痴とも名づくべきものであつて、まじめにその論理の正しいか否かを討究するにも足らぬのは明らかだが、往々にしてこの方法をもつてならぬかの教訓とあきらめを罹災民に与えようとするのが、ごく古代からの東洋風であるためか、帰朝して後に人から聞いてみると、東京においてもより多くの尊敬を受けている老人たちの中に、やはり熱烈に右の天譴説を唱えた人があつたそうである。まことに苦々しいことだと思ふ。<sup>9)</sup>

人々の民俗学への認識は、人間の心情や生活習慣を研

究する学問であり、ある種の非合理的な意識の存在を前提として感じるように感ぜられる。しかし柳田の反論をみれば彼の方法が合理的な精神に基盤をもっていたことがわかる。東京で「多くの尊敬を受けている老人」は渋沢栄一であろう。その天譴論を「まことに苦々しい」と批判したのである。のちに「常民」として定着する柳田の庶民観を予告しているようだ。

それならば天譴論は芥川や柳田の反論によつて打撃を受けたであろうか。決してそうではなかった。

#### 4 「国民精神作興ニ関スル詔書」に隠れた天譴論

天譴論は国定イデオロギーにも潜入した。

摂政裕仁が一九二三年一月一〇日に発した「国民精神作興ニ関スル詔書」<sup>(10)</sup>は震災後の物心両面の混乱から国家と国民の回復を求めたものである。なかに次の文言がある。

・ 國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニ在リ之ヲ涵養シ之ヲ振作シテ以テ國本ヲ固クサセルヘカラス

・ 輓近學術益々開ケ人智日二進ム然レトモ浮華放縱ノ習漸ク萌シ輕佻詭激ノ風モ亦生ス今ニ及ヒテ時弊ヲ革メスムハ或ハ前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル

・ 綱紀ヲ肅正シ風俗ヲ匡勵シ浮華放縱ヲ斥ケテ質實剛健ニ趨キ輕佻詭激ヲ矯メテ醇厚中正ニ歸シ人倫ヲ明ニシテ親和ヲ致シ公德ヲ守リテ秩序ヲ保チ責任ヲ重シ節制ヲ尚ヒ忠孝義勇ノ美ヲ掲ケ

直接に天譴を示す言葉はない。しかし、「大戦以来所謂お調子づいて鼓腹擊壤に陥りはしなかつたか」(渋沢)、「世を挙り心傲ると歳久し天地の譴怒」(白秋)、「天が人間の不埒を憤る余りに降す懲罰」(逍遙)などの文脈に相通ずるところがある。

#### 5 あの頃は誰も彼も「天譴」を説いた

社会学者の清水幾太郎は、関東大震災の回想記のなかで、一ヶ月遅れて一〇月一日に始まった小学校の授業の記憶を書いている。それは「修身」担当の野村という教諭の授業だった。<sup>(11)</sup>

先生は何もおつしやらずに、黒板に「天譴」と大書され、更に「天物暴殄」と大書された。前者は「天罰」というような意味であり、後者は「贅沢三昧」というような意味である。つまり地震は、私たちの贅沢三昧を戒めるために下された天罰である、というのが 先生のお話の大意であった。／貧しい、汚い、臭い場末の人々、天物暴殄に最も縁の遠い人々、その人々の上に最も厳しい天罰が下されたことになるのではないか。私は、先生の説明が一段落つくのも待たずに、右のような趣旨の質問をした。先生がなんとお答えになったかは覚えていない。何とお答えになったとしても、私は「天譴」および「天物暴殄」いう観念を受け容れることはできなかった。／野村先生のオリジナルな見解ではなく、あの頃は、誰も彼も「天譴」ということを説いていた。初めに説いたのは、渋沢栄一子爵であつたらしい。

「野村先生」のエピソードと「あの頃は、誰も彼も「天譴」ということを説いていた」という清水の言葉は時代

の空気を反映していると思う。

## 6 「バブル・アンド・バースト」の一〇年間

天譴説が結果として世論の大勢となった理由は何か。一つは、日本経済が第一次世界大戦の恩恵を大きく享受していたことである。

二つは、その後に戦後恐慌が起こったことである。日本は自らは殆ど「欧州戦争」（第一次世界大戦）を戦わずに、戦争で物資が不足した世界に商品とサービスを売りまくった。「大戦ブーム」を満喫したのである。

「日本の輸出額は一九一四年の約六億円から一九年の約二一億円へと急増した。／世界的な船舶不足と海上運賃の高騰が生じたため日本の海運業は空前の活況となり、海運・保険料収入を中心に貿易外収支も大幅な受取超過を記録した。一九一五年から一九年までの五年間における経常収支の黒字累計額は三〇億円余りに達した」<sup>(12)</sup>。



日本は対外債権国になった。正貨準備も一九一四年末の三億四〇〇万円から二〇年末には二億七八〇〇万円へと激増した。

「大正デモクラシー」期に重なるこの時期に都市化と大衆社会化が始まっていた。たとえば百貨店はそれを象徴するものであった。渋沢は次のように書いている。後述する内村鑑三の日記にも同種の観察がある。

昔は贅沢な品物売る店はひっそりとして居たものだった。申さば隠して売るといふ様にして、決して賑々しいようにはしなかつた。処が今日になると、立派な店、大きな店になればなる程、誇張した広告をし店飾りをしてお客を吸引するようにして居る。私も度々帰途、三越や白木屋などの前を通ることがあるが、其の華やかな店飾りに驚かされるのである。併し之れに依つて其の店が維持されることを思うと、一人寒心に堪えないことを思わぬ訳にはいかぬ。(13)

一九二〇年に株価と物価が暴落した。二〇年代戦後反動恐慌の開幕である。人々は第一次世界大戦を挟む一〇

年間にジェットコースターの昇降のような「ブーム・アンド・バーストboom and burst（繁栄と崩壊）」を経験したのである。

そこへ巨大な自然災害が襲いかかった。

「帝都」は壊滅した。自然現象とその効果を科学的に説明することはもちろん可能である。社会心理的にも説明しうるかもしれない。芥川龍之介や柳田国男はその立場にあるのである。

しかし、想像を超える自然現象に遭遇したとき、人々の反応は多様であり、必ずしも冷静なものでありえない。パニックの感情が生まれ、羨望、怨念、挫折の気分が錯綜して「天譴論」への共感が生じたことも理解可能である。反応は天譴論だけではない。諦観の思想や二ヒリズムも起こった。

天譴論は、超越者を意識し、その超越者に、依存したり、救いを求めたり、そこから教訓を引きださう、という思考である。それをここでは「形而上学的」な思考と呼んでおく。渋沢の天譴論も一つの「形而上学的」思考といえる。「形而上学的」な思考にも様々なレベルのもの

があつた。

## 二 キリスト者内村鑑三の「天譴論」

内村鑑三による天譴論は関東大震災に関する高い水準の思考であり普遍性をもっていた。今日の我々に多くの示唆を与えるものだと私は考える。

内村は、日本のキリスト者が大地震をどう捉えたかを示す貴重かつ希有な記録を残した。彼は日記、説教、文章によつてその精神の葛藤と克服への努力を示した。

### 1 天の使者が八月三十一日の夕暮に

やや長い引用になるが、次に掲げるのは「末日の模型」という内村の文章である。<sup>(14)</sup>

日本国の華を鍾めたる東京市は滅びた。しかし何が滅びたのである乎。帝国劇場が滅びた。三越呉服店が滅びた。白木屋、松屋、伊東呉服店が滅びた。御木本の真珠店が滅びた。天賞堂、大勝堂の裝飾店

が滅びた。実に惜しい事である。然し乍ら若し試に天の使者が、大震災の前日、即ち八月三十一日の夕暮、新橋より上野まで、審判の剣を掲げて、通過したと仮定するならば、彼は此家こそ実に天国建設の為に必要欠くべからざる者であると認めたるを発見したであらう乎。私は一軒も無かつたであらうと思ふ。

三越も白木屋も天国建設の為に害を為す者であつても益を為す者ではなかつたと思ふ。或人は問ふであらう「日本全国に聖書を供給する京橋尾張町の米国聖書会社は如何、内村先生の著書を出版し又販売する同町の警醒社書店は如何」と。私は之に答へて曰ふ「主は知り給ふ」と。多分天使は之をも火を以て潔むる必要を認めたであらうと思ふ。如く斯くにして、人生が遊戯でない限り、正義の実現が万物存在の理由である限り私共は神が此虚栄の街を滅し給ひたればとて、残忍無慈悲を以て彼を責むる事は出来ない。／聖書に記すが如く、天使は此状を見て曰うたであらう「然り主たる全能の神よ、爾の審判は正しく且つ義なり」と（黙示録十六書七節）。

之に付随して無<sup>つまなきもの</sup> 辜の死の問題が起る。此たびの災禍に於ても、他の災禍の場合に於けるが如くに、災禍を呼びし罪に直接何の關係なき多くの者が死し又苦しんだ。私共は無辜の苦患くるしみに關する人生の深き奧義を探ることは出来ない。／私共は罪を審判さばき給ひし正義の聖手みてを義とするが、それと同時に、その犠牲となりし多くの人の為に泣く。そして此事に關し最も甚しく痛み給ふ者は天に在ます父御自身であると信ずる。彼は我等の知らざる或る方法を以て充分に此苦痛を償ひ給ふと信ずる。

キリスト再臨の反對論者は常に言ふ、天然にも歴史にもカタストロフィー即ち激變なる者はない、万事万物尽く徐々に進化するのであると。然るに事實は然らずして、私共は茲に大激變を目撃したのである。一夜にして大都市が滅亡したのである。

三百年かかゝつて作り上げられし所謂江戸文明が数分間にして毀れたのである。是は確かにカタストロフィー（激變）ではない乎。大正十二年九月一日

午前十一時五十五分に、江戸文明は滅びて、茲に善か悪かは未だ判明しないが、何れにしる日本国の歴史に新紀元が開かれたのである。

私供を此たび見舞ひしカタストロフィーは全世界を最後に見舞ふべき大カタストロフィーの模型である。今回の災害に於て私供は一日の中に大東京が燃え毀れて焦土と化した慘劇を目撃した。然るに彼の日には全世界が燃え毀れて、体質やけと尽く焚鎔やけとけんとの事である。此事があつて彼の事は無いとは言ひ得ない。神も天然も学者の学説や、文士の思想には何の遠慮会釈もなく其意おもふがまゝを断行する。悲慘の極、酸鼻の極と歎いた所が其れまでである。私供は神の言ことばに此事あるを示されて、常に之に應ずるの準備を為すべきである。即ち潔き行を為し、神を敬ひて神の日の来るのを待つべきである。「人々平和無事なりと言わん時滅亡ほろび忽たちまちに來らん、人絶えて避くることを得じ」とテサロニケ前書五章三節にあるが如しである。

滅亡は度々人類に臨む。然し滅亡の為の滅亡ではない。／救ひの為の滅亡である。世の終末と聞けば恐ろしくあるが終末ではない。新天地の開始である。／之に由て東京と日本とが亡びるのではない。より善き、より義ただしきより潔きよき東京と日本が現れんとしているのである。

## 2 芸術と恋愛の東京が潰れた

内村は一九三三年九月五日の日記にこうも書いている。<sup>(15)</sup>

呆然として居る。恐ろしき話を沢山に聞かされる。

東京は一日にして、日本国の首府たるの榮譽を奪はれたのである。天使が剣を掲げて裁判さいばんを全市の上に行うたやうに感ずる。然し是は恩恵の裁判であると信ずる。東京は今より宗教道德の中心となつて全国を支配するであらう。東京が潰れたのではない。「芸術と恋愛と」の東京が潰れたのである。我等の説教を以てしては到底行ふこと能はざる大改造を、神は地震と火を以つて行ひ給うたのである。「神の日には

天然え毀れ体たいしつやけと質しつやけと焚や溶けけん、然れど我等は約束に因りて新しき天と地を望み待てり、義其中に在り」とある某日が来たのである（ペテロ後書三章 十二、十三節）。玄関の入口に左の如く張出した。

今は悲惨を語るべき時ではありません。希望を語るべき時であります。夜はずでに過ぎて光が臨んだのであります。皆様光に向つてお進みなさい。殺さん為の打撃ではあません。救はん為の名医の施した手術であります。感謝して之を受けて、健康にお進みなさい。

我民の罪惡を責むるの時は既に過ぎた。今より後はイザヤ書第四十章以下の予言者となり、彼等を慰め、彼等の蒙りし傷を癒さねばならない。「慰めよ、汝等我民を慰めよ」と。

## 3 内村鑑三の大震災論を要約すると

内村が関東大震災に関して残した説教と論説を通して

私が理解したその論理はおよそ次の通りである。

①大震災は自然現象であると同時に遇う人によつて「恩恵」にも「刑罰」にもなる。洪沢栄一の天譴論を「実に然り」であるとみる。

②なぜなら、震災前の東京は「罪を犯せる国人、邪曲を負ふ民、悪を為す者の裔」の住む「義を慕ふ者の居るに堪へない所」であつたからである。

③このカタストロフィー（破局）は世界を最後に見舞う大カタストロフィーの模型（モデル）である。

④しかし多数の無辜の民も死んだ。しかし彼等も国民全体の罪を贖なうために死んだのである。この不条理を「痛み給ふ者は天に在ます父御自身」である。

⑤今度のことは「救いのための滅亡」であるが終末ではない。良き日本が出現しようとしているのである。キリスト者は神の許しを乞ひ祈ることによつて新日本を作り出すのである。

日記や説教や原稿を読むと内村の強い信仰心が地震の現実により圧倒され崩壊する危機を感じるさまが伝わってくる。とくに無辜の民を巻き込む「不条理」に彼は容

易には納得できなかった。

「末日の模型」には次のような部分がある。

実に悲惨の極、之を言語に尽すことは出来ない。之が為に神の存在を疑ふ人もあらう。人生の無意味を唱ふる人もあらう。然し在つた事は在つたのである。

曾てドクトル・ジョンソンが一七五五年に起りし葡萄牙（ポルトガル）国の首府リスボンの地震の事を聴きし時に、常には強固なる信仰を以て称へられし彼の信も、此時ばかりは動いたとの事である。其如くに私共も亦此惨劇を目前に見て、「神若し在りすれば此事あるは如何」との問を発したくなる。然るに天に声なし地に口なしである。

無辜への問題意識は、聖書にみえる代表的な「天譴」論議である「ソドムとゴモラの覆滅」への関心——このテーマへの論考も「悩めるキリスト者」の心情が表出している——を経て常に説教へと向かった。一方、惨劇か

ら復活する「良き日本」というとき、内村鑑三はどんな「理想国家」のイメージをもっていたのであろうか。

#### 4 軍事・経済・芸術大日本への批判

内村は関東大震災後の一九二三年九月二八日に「日本の天職」と題する説教を行った。<sup>(16)</sup>

日本の天職は何乎。日本は特に何を以て神に事ふべき乎。世界は日本より何を期待する乎。日本は人類の進歩に何を貢献すべき乎。

右はその説教の冒頭の言葉である。大震災の混乱の中で彼はキリスト者の使命 *mission* を吐露した。彼は近代日本の根源的な在りようを問いそれへの答えを書いたのである。以下にこの説教の要約を記す。

人に天職があるように国にも使命がある。エジプトとバビロンは最初の物質文明を世界に提供した。フェニキアは商業によって世界を助けた。ギリシヤは美術、文芸、

哲学を生んだ。ユダヤは宗教を伝えた。内村は「天職を語る時に神に対する職分」を語るといふ。宗教者として当然の言葉である。以下のように内村は自問自答を重ねていく。

第一に、日本は「武の国」として世界を征定する職分があるのではないかと自問する。確かに日本は「支那に勝ち、露西亞に勝ち、独逸に勝ち、戦つて勝たざるはない」。しかしそれは最近の事実に過ぎない。戦争は日本人の趣好に適しない。彼らは本来平和を愛する農民である。豊臣秀吉が大陸征服に失敗したのち、徳川三百年の泰平が続いたのは日本人の平和愛好の天性による。これは軍事大日本の否定の発言である。

第二に、日本は商業工業を以て世界の覇権をにぎる国であるべきか。これにも大きな疑問符が付く。商業は国旗の後に従うというが、その「国旗は軍艦と軍隊とに由て運ばるゝが常である／大海軍、大商業、大工業、所謂強大国は孰れも此三本足の上に立つのである」。

内村は「所謂一等国は日本の居るべき位置である乎」と問うて「大海軍を擁し、大商船を浮べ、商業工業を以て世界の競争に入るのが日本の本分である乎。私は無いと

信ずる」という。これは経済大国日本の否定の発言である。

第三に、「日本人の美術、工芸、文学に於て語るの時を持たない」と内村はいう。彼は日本人のこの方面における優秀性を認め、北斎、近松、芭蕉の美点を否定しない。しかし次の言葉が多くを語る。「日本人の天才には驚くべき者がある。唯悲しむべきは獨創性の欠乏である。日本人は新たに思想を起し得ない。彼等は改良家であつて獨創家ではない。天然を画くには巧みであるが、進んで大胆に天然の秘密を探り出す能に乏しい」。これは文化大国日本の否定の発言である。

## 5 日本の天職は宗教国家として生きること

ここで原理主義者内村は次のように結論する。

日本人は特別に如何なる民である乎。私は答へて曰ふ宗教の民であると。斯く云ひて私は私の田に水を引き入れんとするのではない。日本の歴史と日本人の性質を見て斯く曰はざるを得ないのである。人

は明治の日本人を見て私の此提言の全然理由なきを唱ふるであらうが、然しそれは間違つて居る。国民の歴史に於て七十年は短き時期である。明治大正の物質的文明は日本に取り一時的現象であつた。恰も人の一生に生意気時代があるが如くに、明治大正は日本の生意気時代であつた。そして此時代は今や終らんとして居る。

内村鑑三の、原理主義的かつ「説教的」な言説に接する者は大震災論としては異例なものだと感ずる。渋沢の天譴論は通俗道徳的であり、震災復興イデオロギーとして「時代精神」の役割を担つた。対照的に内村の言説は私の知る限り知識人にも論じられることはなかつた。

二一世紀のリアリズムの世界にあつては、内村の天譴論——それは即ち弁神論である——が、「荒唐無稽」の響きをもつことは否めない。しかし内村が抱いたこの問題は、一八世紀のヨーロッパにあつては「荒唐無稽」なものではなかつた。

### 三 リスボン大地震と二人の啓蒙思想家

以下に考察するのは西欧版「天譴論」論争である。それはリスボン大地震に関して二人の啓蒙主義者の間に交わされた論争であった。二人とはフランスの思想家ヴォルテール（本名フランソワマリ・アルエ）とジャン＝ジャック・ルソーである。

一七五五年一月一日、ポルトガルの首都リスボンの町は激しい地震、続く大火、津波に襲われた。中世以来繁栄してきたこの町の建造物はことごとく崩壊し、死者は数万人に及んだといわれる。

そのスケールは現在の基準に照らすとどの程度であったか。『理科年表』に「世界のおもな大地震・被害地震年表」という表がある。それによると一八世紀の百年間に、マグニチュード七・八以上または死者が一〇〇人以上の地震は全世界で七二回発生している。うちマグニチュード八以上は一九回ある。リスボン大地震はマグニチュード八・五、死者は六万二〇〇〇名（「別」五万五〇〇〇）の表記あり）であった。<sup>(17)</sup>

#### 1 ヴォルテールの最初の反応

この大惨事に最初に反応したのはヴォルテールである。彼は長文の詩を書いて問題を提起した。それに対してルソーも長文の手紙の反論を書いた。そして今も古典として残る哲学コント『カンディード』はこの論争に触発されて書かれた。のちにヴォルテールの代表作となる。

当時スイスのジュネーブ郊外にいたヴォルテールに地震の報が届いたのは一月二四日であった。同日付けで主治医ジャン＝ロベール・トロンジャンに宛てた手紙に彼はこう書いている。<sup>(18)</sup>

実に残酷な物理です。運動法則が「可能な最上の世界」にいかんにしてかくも恐ろしい災害を惹き起こすかを推定することはたいへんな困惑でしょう。わが隣人たる一〇万の蟻が突如として蟻塚の下に押しつぶされおそくは半数が瓦礫の下から救い出されず、言いようのない苦痛で死んでいるのです。ヨーロッパの果てで幾多の家族が破産し、あなたの



国の一〇〇人の商人の財産がリスボンの廃墟の中に落ち込んだのです。人生という賭けは、なんと悲惨な偶然の賭けなんでしょう。とりわけ異端審問所が倒れずに残っていたら、説教家たちはなんと言うでしょうか。審問官の神父たちだけでも他の人と同じように圧しつぶされているとよいのですが。そうすれば、人間を迫害すべきでないという教えになるでしょう。なぜなら、何人かの神聖なならず者が何人かの狂信者を焼いている間に、大地はその両者を呑みこんでくれるからです。

喜劇作家シャルル・バリソに宛てた同年一月一日付のルソーの手紙には次のくだりがある。<sup>(19)</sup>

ジュネーブではリスボンとポルトガルの災害もつばらの噂です。何人かの商人がそれらと係わりがあるのです。リスボンには一軒の家も残っていません。すべてがのみこまれるか焼けたのです。二十の町が壊されました。カデイスはしばらく海に没しました。カデイスから数里離れたコニルという小さな

町はまったく崩壊してしまいました。それはあの国にとって最後の審判であり、欠けていたのはラッパだけです。イギリス人については、結局、彼らは失う以上に得るでしょう。彼らはポルトガルの再建に必要なものをすべて高く売りこむでしょうから。

## 2 長編詩『リスボンの災厄に関する詩』

ヴォルテールは、二三四行に及ぶ長編詩『リスボンの災厄に関する詩』を一気に書き上げ一月四日にはスイスの印刷業者に送付した。長編詩の一部を次に掲げる。<sup>(20)</sup>

「すべては善なり」と叫ぶ誤った哲学者よ、馳せつけて、眺めてみよ、あの恐ろしい廃墟を、  
あの残骸、あの破片、あの不幸な灰を、  
折り重なったあの女たち、あの子供たちを、  
割れた大理石の下に、散乱したあの手足を。  
大地がむさぼり食う幾十万の不幸な人びと、  
彼らは血まみれに引き裂かれ、まだびくびく動き、  
自分たちの屋根の下に埋まって、救いもなく、

苦悩の恐怖の中に、その痛ましい命を終わる。……この犠牲者の山を見ながら、あなたはいうのだろうか。「神が復讐されたのだ。彼らの死はその罪の報い」と。押しつぶされて血まみれの、母親の胸のあの子供らは、いかなる罪、いかなる過ちを犯したというのか。いまやなきリスポンは、快楽にふけるロンドン、パリよりも、悪徳が多くあるというのだろうか。

いつの日か、すべてが善になるうとは、われらの希望、今日、すべてが善なりとは錯覚。

ヴォルテールが批判している「すべては善なり」という「誤った哲学」とは何か。それは当時の支配的な世界観——少なくともその一つであった——ライプニッツの「最善説」または「予定調和説」のことである。「この世界は最善なものとして出来ている」、単純化すれば「最善説」はこの一言に尽きる。

ヴォルテールの愛人であったシャトレ侯爵夫人は自然科学の才能に優れ、自ら『自然科学教程』を著し、ニュートンの『自然科学の数理的原則』の翻訳も出版した。ラ

イプニッツの信奉者であった夫人から彼はその知識を得たのである。『人間論』の著者で英国詩人のポープも最善説の提唱者であった。一七二八年にイギリスに逃れていたヴォルテールはそのポープとも交際している。

この最善説に対して大きな疑念をもたらしたのがリスボン地震であった。また翌一七五六年に勃発した英仏間の七年戦争の惨禍もヴォルテールの信ずる最善説への打撃となった。

### 3 ジャン＝ジャック・ルソーの反発

ルソーはこの長編詩に対して翌一七五六年八月一日日付の長文の手紙でヴォルテールに反論した。ルソーは厄災は神の仕業ではないという。人間の文明とともに形成された悪であるという立場に立つからである。たとえば次のようにいう。<sup>(21)</sup>

私の不満はすべて、リスボンの大震災に関する詩編に対してあるのです。

なぜならあなたに着想を与えたと思われる人間愛

(ユマニテ)にいつそうふさわしい結果を期待して  
いましたから。あなたは、ポープとライブニッツが  
すべては善であると主張しながら、私たちの災難を  
侮辱しているといつて非難し、また私たちの不幸の  
光景を誇張するあまり感情を悪化させています。私  
が期待した慰めのかわりに、私を深く悲しませるば  
かりです。私がどれほど不幸であるかを自分では十  
分にわかっていないのではないかとあなたは懸念し  
ておられるようですが、すべては悪であると私に証  
明することによって、私の気持を大いに鎮静させて  
いると思いきんでおられるようです

思い違いをしないでいただきたい。あなたの目論  
見とはまったく反対のことが起こるのです。あなた  
は楽天主義を非常に残酷なものとお考えですが、し  
かしこの楽天主義は、あなたが堪えがたいものとし  
て描いて見せてくださるその苦しみのゆえに、私に  
は慰めとなっています。

思想史家の川合清隆はこう書いている。<sup>(22)</sup>

ルソーは『不平等論』の悪の系譜学によって、悪  
は人類社会の生成とともに生まれたのであり、文明  
の産物であることを証明した。そうして、弁神論問  
題を形而上学から形而下の問題へと引き下ろした。  
ルソー以後、悪の問題は神秘性を喪失し、過去にお  
けるその起源と未来におけるその解決を展望するこ  
とが可能な社会現象となり、社会科学が説明すべき  
対象として存在するものとなった。

#### 4 生涯の代表作となった『カンディード』

さて『カンディード』である。

ウエストファリアに私生児として生まれたカンディー  
ドは男爵の家に住んでいた。「この世はすべて善である」  
と説く哲学者パンゲロスの楽天主義に心酔している。し  
かし男爵の娘「キユネゴンド姫」に身分違いの恋をして  
追放される。カンディードはその後、ヨーロッパの各地  
を彷徨う。奴隷にされたり海賊に襲われたり、考えられ  
る限りの不幸と災難に見舞われる。さらに南米大陸に渡  
り桃源郷「エルドラド」に一ヶ月を過ごして、なに不自

由ない物質的生活を享受する。しかしキュネゴンドとの再会を望んでその「天国」からも脱出する。旅の途次、リスボンで大地震に遭遇する。カンデイドの楽天主義はその惨状に動揺する。あらゆる不運と逆境を乗り越えた果てに彼は、死んだはずの師パングロス、殺したと思っていた恋人の兄、そして夢にまで見ていたキュネゴンドに再会する。彼女は女性としてのあらゆる陵辱を忍んで生きながらえていた。

トルコのコンスタンチノープルに小さな農園を手に入れた一同——それはカンデイド、醜くなつたキュネゴンド、師パングロスらである——は落ち着いた生活に入る。パングロスは楽天説を捨てていなかったが、カンデイドの言葉「しかし、ぼくたちの庭を耕さなければなりません」でこの長編哲学コントは終わる。

カンデイドは楽天説の信奉者から現実主義者または生活者へと考えを変えたのである。滑稽と奇怪と災難に満ちた冒険譚の結末で、カンデイドは「最善説」を放棄した。その代わりに「農園を耕す」という小さな希望を提示した。

カンデイドの「転向」には様々な評価がなされている。仏文学者の植田祐次は『カンデイド』の構成や叙述を緻密に分析して作者の実人生との関係をあぶり出している。その分析を要約すれば、啓蒙思想の旗手による華麗な宮廷生活と彼らへの啓蒙の期待、その挫折と爾後の政治的活動による人間としての自己再生である。<sup>(23)</sup>

#### 四 「形而上学」的態度の意義と限界

大災害が起こった。人間に理解しがたい不条理である。不条理に対する怒りと悲しみ。これを如何に克服するか。

内村鑑三は、祈りによって乗り越えようとした。神と共に苦しみ祈るといふ行為によって内村はおのれを救済しようとした。更に日本を救おうとした。

内村には論争の相手がおらず自問自答の果てに祈りの境地に到達した。内村の関心は地震への態度決定に留まらない。その射程は日本近代への厳しい評価となった。日清・日露の戦勝に酔う祖国を批判した。更に筆鋒は、経済大国と文化国家の否定にまで及んだ。それはいかにも信仰者の告白である。

ヴォルテールも同じ困難に遭遇したようにみえる。ヴォルテールの問題は地震だけではない。宗派上の対立、啓蒙思想家間の対立、宮廷生活への反発と態度決定の必要という問題があった。内村よりも複雑であった。ヴォルテールは最善説を放棄したが、神は捨てなかつたという<sup>(24)</sup>。

両者の自然災害への問題設定と対応には、共通点がある。超越者の天譴を受け入れるか否か。約二百年の時間と東西の空間を超えて彼らは同じ問題に直面した。

これは座標を動かせば、一八世紀のヨーロッパの出来事ではない。「最善説」の教義を「安全神話」の論理と置き換えれば我々にも同じテーマが立ち現れるであろう。

私が提示したことは、自然災害のもたらす不条理をどう把握するか。その場合に無機質な自然科学や、客観性を本質とする社会科学だけでは掴みきれない人間の心はどう動くのかという問題であった。

このことから何がわかるのか。一つはこの問題が古くで新しいテーマであり、人間の「形而上学的」関心から容易に除くことができないことである。

二つは、にも拘わらず、形而上学は総じて天上に関わ

るのであって、地上の問題は「形而下学」によって解決が図られるということである。

私の問題意識は「東日本大震災の衝撃の正体に迫りたい」というものである。形而下学、具体的には自然科学や社会科学が今次震災にどう迫れるのか、迫れないのか。今回は届かなかつたこの大きなテーマについて別の機会に書きたい。

#### 【注】

(1) 『龍門雜誌』第四二三号、龍門社、一九二三年一月  
第一四回日韓歴史共同研究シンポジウム（韓国・木浦大学、二〇一一年八月）の若尾政希の口頭報告「天変地異の思想」を聞いたことが、本稿執筆の直接の契機となつた。

なお次の二つの論文における分析、時系列的な追跡にも学ぶところがあつた。

後藤嘉宏「関東大震災の天譴論の二側面」、『メディア史研究』四、一九九六年

堀新「関東大震災と天譴論——洪沢栄一を中心に——」、  
共立女子大学総合文化研究所研究叢書二二冊、二〇〇四年

- (2) 前掲『龍門雜誌』第四三六号、一九二五年一月
- (3) 『詩経』、『書経』にみられる周代の「天」にも天譴の意図はみられるが、漢代の董仲舒の考えた天は「国家に道をはずれた失政が起きると、天はまず災害を出して譴告する。それでも反省しないならば更に怪異を出して恐懼させる。それでも改善しないならば、ついに破滅がやってくる。このことから、天の心は君主を愛してその乱を止めようとしていることがわかる」（『漢書』董仲舒伝）、溝口雄三ほか編『中国思想文化事典』、東京大学出版会、二〇〇一年
- (4) その点を「尤も上御一人に置かせられては、万世一系の皇統を践ませられておられるから、是等の傾向によつて、国基の隆盛を妨げられるようなことはなかった」と書いている。（洪澤栄一自叙伝）、洪澤翁頌徳会編、一九三七年）
- (5) 『大正大震災火災誌』、改造社、一九二四年
- (6) 『逍遙選集』、第一〇巻、第一書房、一九七七年
- (7) 『芥川龍之介全集』第六巻、岩波書店、一九七八年
- (8) 前掲『芥川龍之介全集』第六巻
- (9) 『故郷七十年』、『定本柳田国男集別巻第三』、筑摩書房、一九七〇年
- (10) 歴史学研究会編『日本史史料四 近代』、岩波書店、一

九九七年

- (11) 「わが人生の断片」、『清水幾太郎著作集一四』、講談社、一九九三年
- (12) 浜野潔ほか編『日本経済史16000〜20000』、慶應義塾大学出版会、二〇〇九年
- (13) 前掲『洪澤栄一自叙伝』
- (14) 「末日の模型」、『聖書之研究』二七九号、一九二三年一月一〇日
- 村上喜良（立正大教授）は東日本大震災を論じて聖書の「ノアの洪水」、「ソドムの滅亡」、「ヨブ記」に記述された神による罰を信ずることに否定的であった。（「キリスト教的生命倫理学から災害を考える」、立正大学「ケアロジーを考える」全六回の講演会の第二回、二〇一一年一月一五日、講師は毎回交代）
- (15) 『内村鑑三著作集三四』、岩波書店、一九八三年
- (16) 前掲『内村鑑三著作集三四』
- (17) 国立天文台編纂『理科年表』平成二三年版、丸善株式会社、二〇一〇年
- 因みに七二回中、日本の地震は八回あり最大のものは宝永四年一〇月四日（一七〇七年一〇月二七日）の「宝永地震」である。マグニチュード八・六、死者は日本史上最大の五〇〇〇〇人（「別」死者二万？）の表

記あり」と記述されている。

(18) 高橋安光編訳『ヴォルテール書簡集』、法政大学出版会、二〇〇八年

(19) 前掲『ヴォルテール書簡集』

(20) 小林善彦著『「知」の革命家ヴォルテール―卑劣な奴を叩きつぶせ』、柘植書房新社、二〇〇八年

(21) 『ルソー全集』第五卷、白水社、一九七九年

(22) 川合清隆著『ルソーの啓蒙哲学―自然・社会・神』、名古屋大学出版会、二〇〇二年

(23) 訳者植田祐次による『カンディード』（岩波文庫、二〇〇五年）の「解説」

(24) 川合清隆前掲書に次の記述がある。

「さらに、ヴォルテールが、一時的に深刻な精神的危機にさらされたにしろ、彼が無神論に敵意を抱き続け、その後も無神論批判の論文をいくつも書いた事実が、このことを異論の余地のないものに行っている」。(二七八頁)

#### 【附記】

本稿執筆に際して植田祐次氏より書面による懇切なご教示を得た。ここに記して謝意を表す。